

# 河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

1988年3月

河内長野市教育委員会

## 序 文

河内長野市三日市町、片添町にまたがる約 6 ha の石川河岸段丘において、約 2 年にわたって行われた三日市遺跡の発掘調査がほぼ終了したのは周知のことである。現在、その調査報告書の刊行が待たれるところであるが、この発掘調査によっては、新たに発見された考古資料も多く、本市の歴史がより一層鮮明にされることはある。

この例でもわかるように、埋蔵文化財と呼ばれるものは、通常、土中深くに永年眠っているため、我々が普段目にすることは殆んど無く、見過ごしがちなものであるが、歴史を正しく理解するうえで、これらが果す役割は非常に大きく、重要である。

しかし、埋蔵文化財はその特性上、特に他の文化財に比べ、宅地造成や道路建設などの土木工事によって受ける影響が強く、各種開発の陰で常に減失、破壊の危機に直面しているといえる。

このように埋蔵文化財がおかれている現状は欠して楽観を許すものではなく、この状況を真摯に受けとめ、歴史の証人ともいるべき埋蔵文化財を適切に保護・保存することは、現代を生きる我々に課せられた責務と考え、今回、ここに本書を刊行するものである。

本書が少しでも多くの方々に活用され、地域文化の研究に寄与することを期待するとともに、末尾ながら今回の調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力いただき関係各位に感謝と敬意を表する次第である。

河内長野市教育委員会  
教育長 平井義信

## 例　　言

1. 本書は河内長野市教育委員会が実施した、昭和61・62年度の公共事業に伴う小規模調査の報告書である。
2. 調査は教育委員会社会教育課尾谷雅彦が担当した。
3. 本書の造構については尾谷が、遺物については中村清美が執筆した。
4. 本書の編集は尾谷が担当し、本書の文責は尾谷が負うものである。
5. 遺物整理については、久保八重子・谷口和美、遺物実測では古井晶子・佐々木恵里、トレースは坂本主子、遺物写真は中西和子の協力を得た。
6. 調査においては佐々木恵里・明地奈緒美・鳴川 修・高 正龍・橋本亨・加藤博章・土師春樹・三日市遺跡調査会・河内長野市農林課の協力を得た。

## 目　　次

I.はじめに.....	1
II.高向南遺跡.....	5
III.高向神社遺跡.....	13
IV.日野観音寺遺跡.....	17
V.尾崎遺跡.....	25

## I. はじめに

大阪府の東南端に位置する河内長野市は、葛城山系および岩湧山系から派生する山地性丘陵と石川とその支流の小河川によって形成された狭小な谷と河川段丘によって成り立っている。市域全域は旧河内国錦部郡の範囲に入り、紀伊・大和・和泉の3国に接していた地域である。この為、石川の各支流の谷は、各地に向う街道が通り、古代から交通の要所となっていた。この為、数多くの文化財が残されている。

このような、河内長野市の位置が大阪市への通勤圏内であるところから、早くから住宅開発が進み、近年では、開発の波が従来の丘陵尾根部から河川段丘上に波及してきた。この結果、段丘に埋没していた埋蔵文化財が開発にともない危機に瀕している。

昭和59年度からの三日市遺跡をかわきりに、埋蔵文化財の調査・立会の件数は増加している。このなかで、民間開発事業は大規模な宅地開発から中小規模の宅地開発とマンション建築の件数が増加している。公共事業では、外環状線や市道などの道路アクセス、公共下水道、更には、区画整理事業など、面的に広がるものがあり、埋蔵文化財の対応を避けて通ることのできないものばかりである。この為、新規発見の遺跡も増加している。

上記の状況の中で、市教育委員会は三日市遺跡については引き続き三日市遺跡調査会が主体となって調査を続けている。また、公共事業については、計画段階で埋蔵文化財の保存についての協議を進め、事前の試掘調査の実施による埋蔵文化財の把握につとめている。民間開発事業においても、周知の遺跡以外の500 m<sup>2</sup>以上の開発については試掘調査の協力を求め実施している。

この結果、埋蔵文化財の発掘届・発掘通知・試掘依頼は61年度、62年度と倍増しているのが現状である。これに伴い発掘調査立会の件数も増加している。この状況は今後続くものと思われる。

第1図の遺跡の分布地図は、昭和62年12月現在のものであり地図の訂正是毎年行なっていかなければならないであろう。



第1図 河内長野市遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	塙谷遺跡	弥生時代中期～中世	42	古野町遺跡	中世
2	千代山神社遺跡	中世	43	膳所蒲原里跡	近世
3	菱子尻遺跡	弥生時代～中世	44	木多蒲原里跡	近世
4	小山田2号古墓	奈良時代	45	長野神社遺跡	中世
5	小山田1号古墓	奈良時代	46	上原北遺跡	
6	寺ヶ池遺跡	旧石器時代～縄文時代	47	鳥帽子形八幡神社本殿	中世
7	住吉神社遺跡	中世		鳥帽子形城跡	中世
8	伝「仲哀廟」			鳥帽子形古墳	古墳時代
9	長池窯跡群	中世	48	末広窯跡	中世
10	青ヶ原神社遺跡	中世	49	河合寺城跡	中世
11	塚穴古墳・上原遺跡	古墳時代後期～中世	50	河合寺境内	中世
12	高向遺跡	古墳時代後期～中世	51	福田家住宅	近世
13	懸持寺跡	中世	52	大師山遺跡	弥生時代中期
14	上原町墓地			大師山古墳	古墳時代前期
15	高向南遺跡		53	大師山南古墳	古墳時代
16	高向神社遺跡	中世	54	鏡心寺	平安時代～
17	宮山古墳	古墳時代後期	55	経塚	
18	高木遺跡	旧石器時代～縄文時代	56	三日市遺跡・石仏遺跡	旧石器時代～近世
19	峯山城跡	中世	57	加賀田神社遺跡	
20	日ノ谷城跡	中世	58	庚申	
21	仁玉山城跡	中世	59	延命寺	
22	摩尼院書院		60	川上神社遺跡	中世
23	金剛寺		61	石仏城	中世
24	日野觀音寺遺跡	中世	62	左近城跡	中世
25	福荷山城跡	中世	63	清水遺跡	中世
26	旗藏城跡	中世	64-65	旗藏寺石造五輪・岩瀬墓地	
27	国見城跡(小滝城跡)	中世	66	千早川源南遺跡	中世
28	滝尻跡勞堂跡		67	地藏寺	
29	權現城跡	中世	68	伝大江時親邸跡	
30	清水阿弥陀堂跡	近世	69	旗尾城跡	中世
31	淹煙輝藤	近世	70	葛城第18岩城経塚	
32	堂村地藏堂跡	近世	71	天見駅北方遺跡	中世
33	中村阿弥陀堂跡	近世	72	葛城第16経塚	
34	宮ノ下内蔵	近世	73	蟹井瀬北遺跡	中世
35	天神社遺跡	中世	74	蟹井瀬神社遺跡	中世
36	西の村阿弥陀堂跡	近世	75	蟹井瀬南遺跡	中世
37	東の村観音堂跡	近世	76	流谷八幡神社遺跡	中世
38	光滝寺遺跡	近世	77	岩涌寺多宝塔	
39	向野遺跡		78	苔城第15経塚	
40	五木古墳	古墳時代後期	79	岩涌山	
41	古野古墳	古墳時代後期	80	尾崎遺跡	

第1表 河内長野市遺跡地名表



写1 高向・高向南・高向神社遺跡全景

## II. 高向南遺跡

1. 所在地 河内長野市高向

2. 調査年月日 昭和62年1月

### 3. 位置

岩湧山系に源を発した石川が本

市高向付近で左岸に幅700mの河川段丘を形成する。遺跡は、この段丘上、標高156m付近に位置する。遺跡の西側には高向遺跡が広がり、東側には高向神社、総持寺跡がある。

遺跡は、丹保池の関連水路改修工事で発見されたものである。遺跡の調査は、工事が旧水路の改修のことでもあり、影響する範囲が少なく、工事で地山まで影響を受ける部分（延長16m、幅1.5m）について調査を行なった。

### 4. 遺構

層序は耕土（25cm）・床土（5～20cm）・暗褐色粘土あるいは灰褐色粘土の包含層（20～30cm）・地山となっている。遺構は耕土下20～30cmで検出された。

遺構は、土塙1・柱穴状のピット10が検出された。

〔土塙〕 調査区外に広がる為、全容は判明しなかった。平面形は検出部分で見る限り、方形を呈するようである。検出幅1.6m・深さ0.1m。この遺構からは、土師質皿・瓦器焼・土師質羽釜等が出土している。

〔ピット〕 P 1～6 径20cm～30cm・深さ10cm～15cm、P 7～10 径40cm～50cm・深さ5cm～10cmの2グループに分けることができる。調査範囲が狭い為、建物等の復元は不可能であった。この中でP8からは土師器皿が2点出土している。



第2図 高向南遺跡高向神社位置図

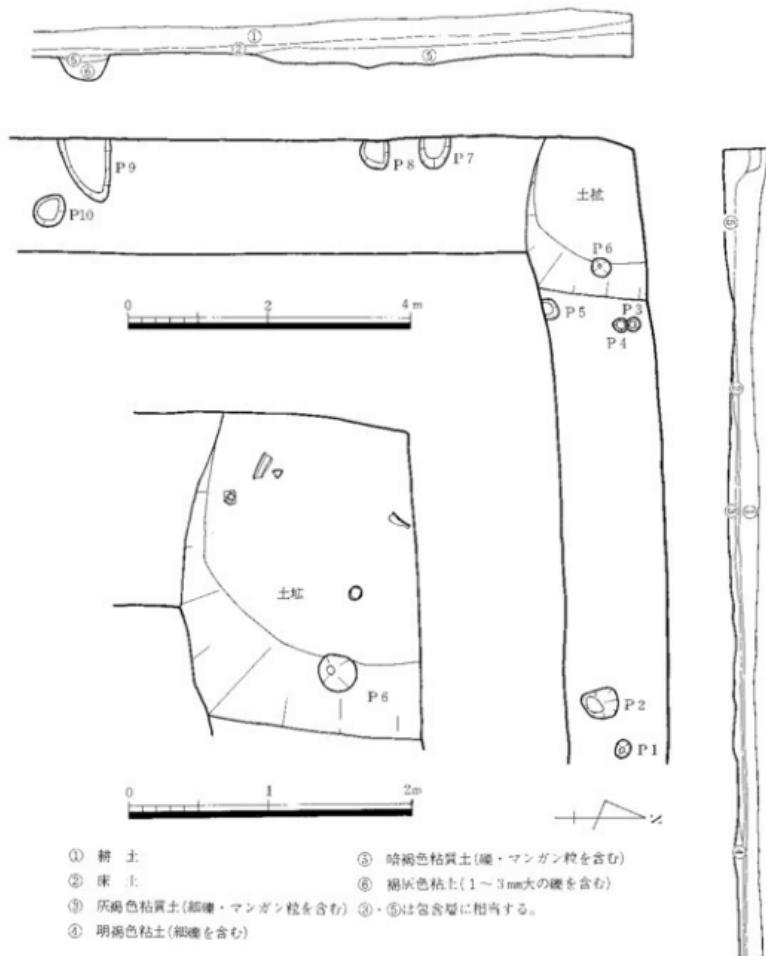
### 5. 遺物

遺物は、土塙とP 8、包含層からそれぞれ出土している。

[土塙] 土塙から瓦器塊(1)、土師質小皿(2)、土師質羽釜(3)が出土した。

(1) 口径15.1cm、高台径5.6cm、器高4.7cmの瓦器塊。

体部はゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁部が稜をもって少し外反する。高台は断面が三角形を成す。



第3図 高向南遺跡遺構実測平面図、断面図

口縁部外面はつよいヨコナデ、体部外面はユビオサエを施す。内面は磨耗の為詳細不明。高台は貼り付け、その後ナデを施す。

色調は内外面共灰白色及び浅黄色を呈す。胎土中には1~3mm大の砂粒を少量含む。

尾上実氏編年でII—3期（鎌倉時代前期）に相当すると考えられる。

- (2) 口径8.6cm、器高2.15cmの土師質小皿。

丸味をもつ底部から内湾しながら緩かに外上方に伸びる。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。

口縁部両面ヨコナデ、体部外面及び底面はユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施す。底部に粘土のつなぎ目が見られる。

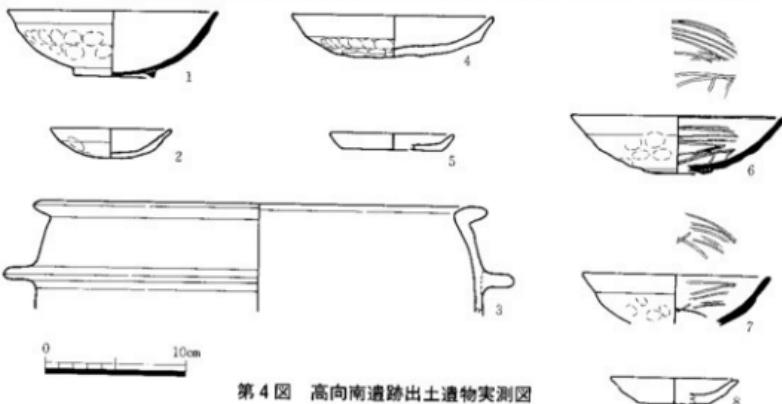
色調は外面が浅橙色、内面はにぶい橙色を呈す。胎土中には2mm大の砂粒を多く含む。

- (3) 口径28.6cm、鋤部径36.0cm、(残高7.7cm)の土師質羽釜。

内傾する口頸部から短かく「く」の字状に極端に外折し、口縁上部はゆるやかな凸面を成す。口縁端部は丸くおさめる。鋤は水平で端部は丸い。

口縁部内外面共ヨコナデ、体部内面はヘラナデ、鋤部は貼り付けの後ヨコナデを施す。

色調は外面がにぶい赤褐色、内面は橙色を呈す。胎土中には2mm大の



第4図 高向南遺跡出土遺物実測図

砂粒がやや含まれる。

〔ピット〕 ピット8から土師質皿(4)、土師質小皿(5)の2点が出土した。

(4) 口径14.2cm、器高3.0cmの土師質皿。

やや平坦な底部から緩かに外上方に伸び、口縁部との境で肥厚し、屈曲して外反しながら外上方に開く。口縁端部は丸くおさめる。

口縁部両面ヨコナデ、体部外面及び底面はユビオサエ、底部内面はナデを施すがユビオサエの凹凸が残る。

色調は外面がにぶい橙色、内面は橙色を呈す。胎土中には2mm大の砂粒が少量含まれる。

(5) 口径8.8cm、器高1.2cmの土師質小皿。

平坦な底部から屈曲してやや内弯気味に外上方に伸びる。口縁端部は丸くおさめる。

口縁部両面ヨコナデ、底部外面はユビオサエの後ナデ、内面底部はナデを施す。

色調は内外面共、にぶい黄橙色を呈す。

〔包含層〕 包含層からは瓦器壺(6)、(7)、土師質小皿(8)が出土した。

(6) 口径14.8cm、高台径3.5cm、器高4.2cmの瓦器壺。

体部はゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁部はやや外反気味である。高台は低く、断面は台形を成す。

口縁部外面はややつよいヨコナデ、体部外面はユビオサエ、内面はヨコ方向の粗いヘラミガキを施す。高台部は貼り付け、その後ナデを施す。口縁端部内面に一条の沈線を巡らす。

色調は外面が灰色、内面は灰色及び灰白色を呈す。

尾上実氏の編年でⅢ-1期もしくは、Ⅲ-2期に相当すると考えられる。

(7) 口径13.0cm、残高3.5cmの瓦器壺。

体部はゆるやかなカーブで立ち上がり、口縁部はやや外反する。

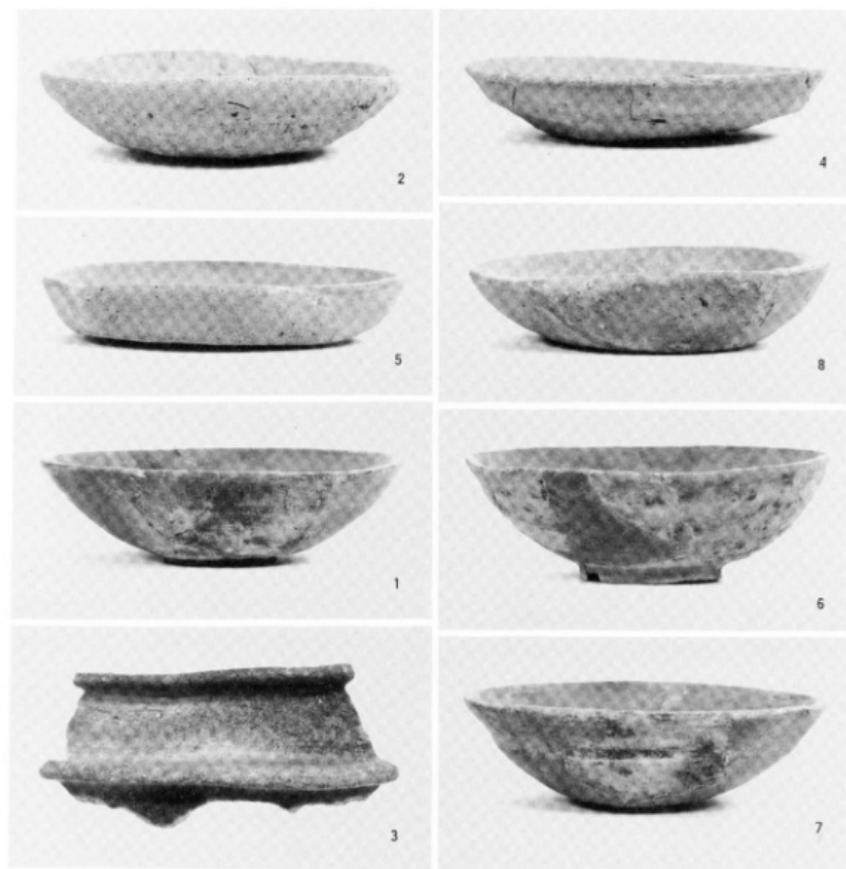
口縁部外面はつよいヨコナデを施し、稜を成す。体部外面はユビオサ

エ、内面はヨコ方面の粗いヘラミガキを施す。

色調は外側が灰色、内面は灰褐色及び灰白色を施す。胎土中には1~2mm大の砂粒が少量含まれる。

(8) 口径9.0cm、器高1.8cm、(底面径4.8cm) の土師質小皿。

平坦な底部と屈曲して斜外方に開く口縁部をもつ。口縁上唇部は平面を成し、端部はやや尖っている。



写2 高向南遺跡出土遺物

口縁部両面ヨコナデ、底部外面はユビオサエの後ナデを施す。

色調は外面が橙色及びにぶい赤褐色、内面は橙色を呈す。胎土中には  
1～3mm大の砂粒を多く含む。

## 6.まとめ

上記の結果、遺物からみて時期としては12世紀前半と考えられる。当遺跡の西に広がる高向遺跡の外環状線の調査で予想に反して遺構がすくなく、おそらく、遺跡の中心は、この高向南遺跡を含めて段丘の東側になるものと考えられる。

写3

高向南遺跡  
全景



調査区南側



土塙全景



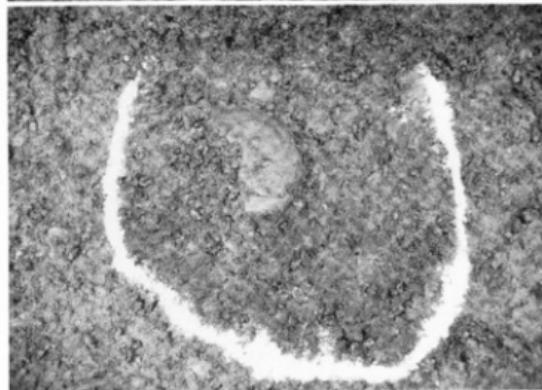
写 4



土塙



土塙  
遺物出土状況



P 8  
遺物出土状況

### III. 高向神社遺跡

1. 所在地 河内長野市高向

2. 調査年月日 昭和61年8月

#### 3. 位置

高向南遺跡の東 1m、石川の左岸の段丘端に神社は位置する。祭神は素戔鳴命・蛭子命・天児屋根命・白山姫命・保食命・菅原道真である。三間社切妻造り桧皮葺きで建築年代は棟札から慶長13年（1608年）とみられている。また、神社には三体の神像が残されている。いずれも木造で女神坐像（平安時代後期）・牛頭天王坐像（鎌倉時代）・男神坐像（室町時代）であり、本殿とともに市指定文化財となっている。

#### 4. 遺物

出土した土器は、神社拝殿の東側の市道の改修工事で発見されたものである。出土した位置は、谷状地形を埋め立てた土からである。

土師皿のみ6点出土した。

おおよそ口径11.6～12.7cm、器高1.6～2.2cmの範囲に納まる。いずれも口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエの後ナデ、内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。

色調は浅黄橙色系を呈す。

（1） 口径11.7cm、器高1.9cmの土師質皿。

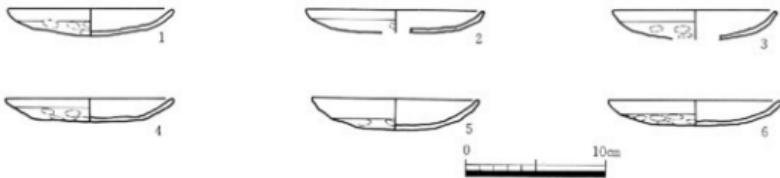
やや丸味をもつ底部から内湾しながら緩かに外上方に開く口縁部をもち、端部はやや肥厚して丸くおさめる。

口縁部両面ヨコナデ、体部外面はユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。

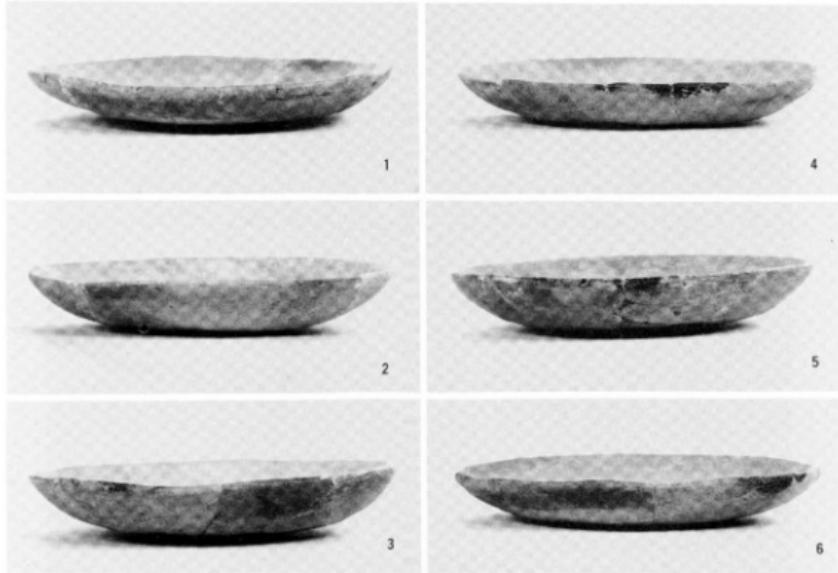
色調は内外面共浅黄橙色を呈し、口縁端部より内外面約1.5cmまでを

帯状に灰褐色化する。

- (2) 口径12.7cm、器高1.6cmの土師質皿。  
平坦な底部から内弯しながら緩かに外上方に開く口縁部をもち、端部はやや肥厚し、つまみあげ状に上方に伸びる。  
口縁部両面ヨコナデ、体部外面はユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。  
色調は外面が浅黄橙色、内面は淡黄色を呈す。
- (3) 口径11.6cm、残存高2.05cmの土師質皿。  
やや平坦な底部から内弯しながら緩かに外上方に開く口縁部をもち、端部は丸くおさめる。  
口縁部両面ヨコナデ、体部外面ユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。  
色調は内外面共黄橙色を呈す。口縁端部の一部にスス付着。
- (4) 口径11.9cm、器高1.7cmの土師質皿。  
平坦な底部から直線的に外上方に開く口縁部をもち、端部はやや肥厚し、丸くおさめる。  
口縁部両面ヨコナデ、体部外面ユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。  
色調は外面が浅黄橙色、内面は灰白色を呈す。口縁端部の一部にスス付着。
- (5) 口径11.8cm、器高2.2cmの土師質皿。  
やや平坦な底部から内弯しながら緩かに外上方に開く口縁部をもち、端部はやや肥厚し、丸くおさめる。  
口縁部両面ヨコナデ、体部外面ユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。  
色調は内外面共にぶい黄橙色を呈す。口縁端部の一部にスス付着。
- (6) 口径12.3cm、器高1.8cmの土師質皿。  
平坦な底部から内弯しながら緩かに外上方に短かく開く口縁部をもち、端部は丸くおさめる。



第5図 高向神社遺跡出土遺物実測図



写5 高向神社遺跡出土遺物

口縁部両面ヨコナデ、体部外面ユビオサエの後ナデ、底部内面は丁寧なナデを施すが、口縁部との境でヨコナデによるわずかな稜を成す。

色調は内外面共浅黄橙色を呈し、口縁端部より内外面約1cmあたりまで帶状ににぶい褐色化する。また、一部にスス付着。



写6 日野観音寺遺跡全景

## IV. 日野觀音寺遺跡

1. 所在地 河内長野市日野

2. 調査年月日 昭和62年5月

### 3. 位置

岩湧山系に源を発した石川が挟

小さな河谷を刻みながら流れ、本市日野地区で大きく蛇行しながら、左岸に小さな河川段丘面による谷を形成する。

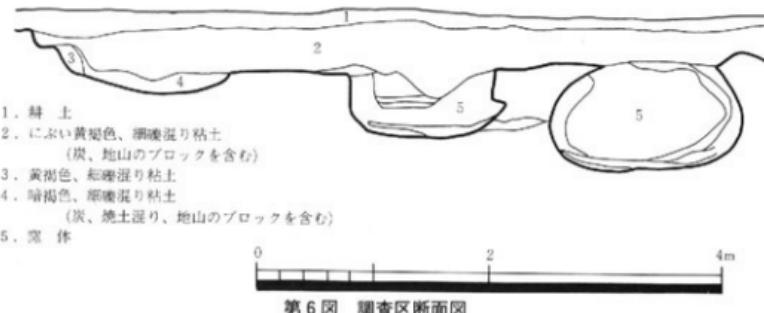
この段丘上には、日野觀音寺があり、今は小堂が建立されているが、中世には多くの御藍が建立されていた寺院であった。

遺構は、この谷の入口、左岸の標高156mに位置する。遺構は、農道の改修工事で法面の断面で検出された。

### 4. 遺構

層序を見ると、上層から耕土(30cm)・にぶい黄褐色細礫混り粘土(60cm)・窯体(焼土)・地山。にぶい黄褐色細礫混り粘土(60cm)には炭焼土が混っていたようである。

遺構は、窯状遺構が2基検出された。



〔1号窯〕 道路により、焚口側 $1/2$ が削平されており、窯体の半分と煙り出し部が検出された。窯体残存長 $1.5\text{m}$ 、煙道部をいれて $2.6\text{m}$ 、残存最大幅 $2\text{m}$ 、奥壁高 $0.7\text{m}$ 、煙り排出口径 $0.5 \times 0.4\text{m}$ 。窯体の側壁は西側が高さ $0.7\text{m}$ 、東側が $0.4\text{m}$ 残存していた。床面はフラットである。主軸方向は南北。

窯体の奥壁の煙道口部両側には $40\text{cm} \times 20\text{cm}$ の河原石が置かれていた。又、排出口には、甕片によつて塞がれた状態であった。

焼成による酸化層のひろがりは $20\text{cm}$ 程度みられた。また、床面には薄く炭層が見られた。

この窯の全体的な平面プランを復元すると、東側の窯壁の残存状態から、東側に横口をあけた逆三角形のプランを呈すると思われる。

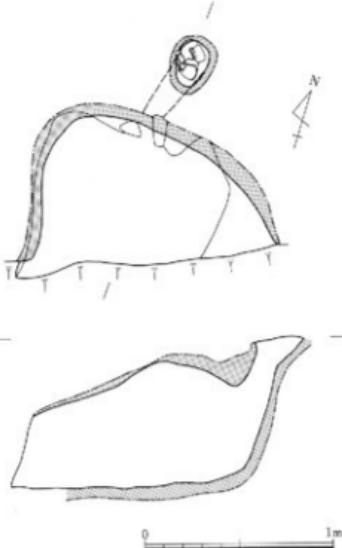
〔2号窯〕 1号窯の東側 $1\text{m}$ に位置する。窯体の横半分以上は道路によって削平を受けている。

窯体残存長 $2.7\text{m}$ ・床最大残存幅 $1.1\text{m}$ 、北側側壁残存高 $0.8\text{m}$ 、奥壁残存高 $0.6\text{m}$ 。床面はフラットである。

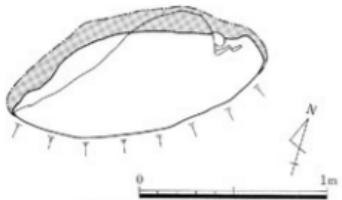
平面プランは不明であるが、主軸方向が東西を示すものと考えられる。

## 5. 遺物

(1) 復原口径 $10.4\text{cm}$ 、残存高 $2.3\text{cm}$ の土師質皿。



第7図 1号窯実測図



第8図 2号窯実測図

内湾しながら上外方に立ちあがる体部にやや外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや尖り気味におさめる。

口縁部両面はヨコナデ、体部外面はユビオサエ、体部内面はナデを施す。

色調は外面がにぶい橙色、内面は浅黄橙色を呈す。胎土中には細砂粒が少量含まれる。(1号窯より出土)

(2) 口径16.8cm、残存高15.05cm、頸部径15.2cm、体部最大径24.3cm、を測る甕。

内湾しながら伸びてきた体部から短かく「く」の字形に外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。

口縁部はヨコナデ、体部外面はユビオサエの後ナデ、体部内面はヘラケズリを施すが、全体的に作りが粗い。

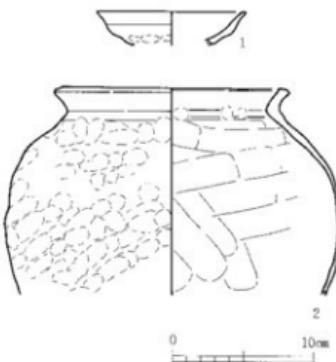
色調は内外面共浅黄橙色を呈すが、外面口縁部から肩部にかけて黒褐色を呈す。(スス付着) 胎土中には1~3mm大の白色砂粒を含む。(2号窯より出土)

## 6.まとめ

上記のような窯状遺構は、現在まで市内各所から検出されており、木炭窯と考えられており、間違いないものと思われる。

市の検出された窯は、大師山遺跡2(5)・三日市遺跡3(6)・長池窯跡群の内小田地区で12(1)、棚原地区で5(2)の計22の窯が調査された。また、報告はされていないが、大師山遺跡の位置する丘陵からも1か所(4)、他の窯跡が確認されているのが2箇所ある。

これらの窯の平面プランは大沢分類(大沢1979)の、B・Cタイプにあては



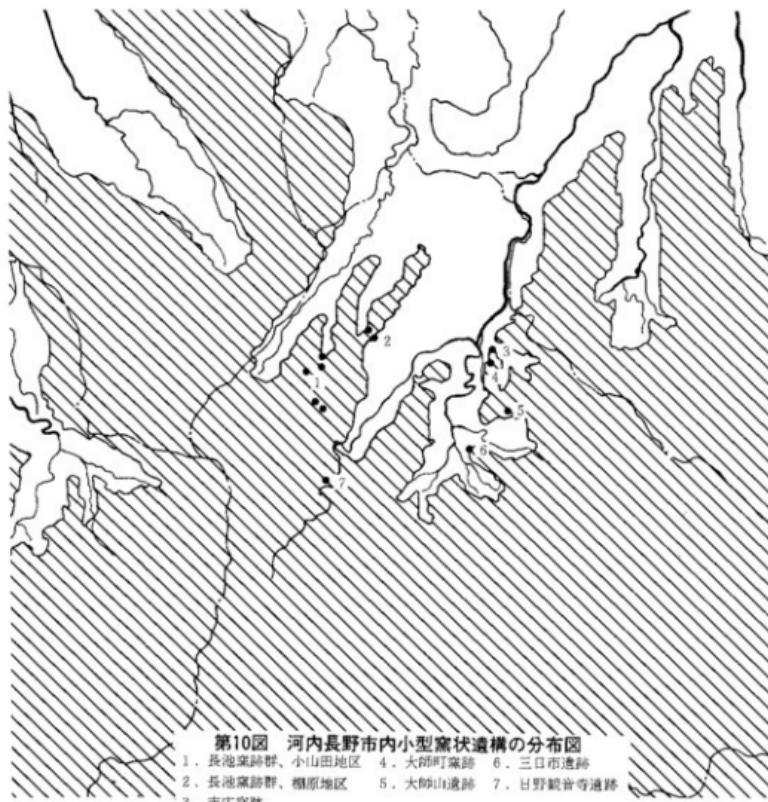
第9図 日野観音寺遺跡出土遺物実測図

めることができる。Bタイプでは、長池棚原地区のTH-4が、熱残留磁気から8世紀代の年代があてられている。また、三日市遺跡のSYIは、出土須恵器から7世紀前半の年代と考えられている。

また、Cタイプで構成されている小山田地区の窯は、10~12世紀前半の年代があてられている。ただ、棚原地区では、同時にCタイプも検出されて、Bタイプと大過ない年代の結果がでている。

今回の窯は、1号窯が遺物から平安時代中期頃に相当する。

大沢正己 1979、「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』  
埼玉県遺跡発掘調査報告書第32集



市内における窯の変遷は9世紀以前のBタイプと8世紀から確認されている。

このような結果から、Cタイプへの変化が考えられる。そして、いずれも製鉄遺跡を伴わず、木炭窯のみで存在する。このことは、木炭生産を主とした目的として作られているということであり、製鉄以外の用途を考えなければならない。

特に8世紀以降のCタイプの小型窯は、その築造にBタイプと比らべ、面積は少なくてすみ、容易にできる。このことは、窯の築造数が多くでき、一窯当たりの人員も少なくてすみ、効率よく多量に生産できるのではないだろうか。8世紀の平城京、平安京の運営にともない、手工業者と消費生活者の集団とともにべき都城内生活が芽ばえた時期に当る。つまり、多くの手工業生産が1ヶ所に集った木炭の消費地が形成されつつある時期である。このような、条件下で製鉄という一つの生産に附随した木炭生産とは別に不特定な用途に用いられる木炭の供給地が形成されていったのではなかろうか。

河内南部は畿内に近く、石川・大和川・淀川を利用することにより、京に運搬可能である。河内国錦部郡は平野部が小なく農業生産量も河内国の中では最も低い地域であると予想される。このような地域における条件から古墳時代以降の人口増加にともない、農耕以外にも経済的基盤を求めなければならない必然的な理由が生じてきたのであろう。  
(中世以降の開発された耕地面積の占める割合が高い)



1



2

写7 日野観音寺遺跡出土遺物

写 8

遺跡  
遠景



調査区  
断面



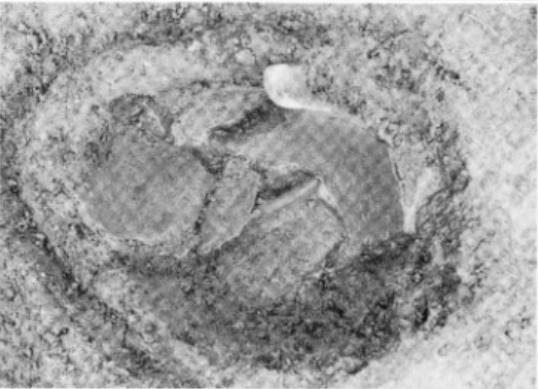
1号窯  
全景



写9



1号窯  
煙道部から



1号窯  
煙道部  
土器出土状況



2号窯  
全景



写10 尾崎遺跡全景

## V. 尾崎遺跡

1. 所在地 河内長野市加賀田

2. 調査年月日 昭和62年3月

3. 位置

石川の上流、天見川の左岸、河

川段丘上の標高 m に位置する。遺跡は国道371号線のバイパス工事により発見されたものである。工事においては明確な遺構は検出されなかったようである。

当遺跡の対岸、天見川の右岸には三日市遺跡が所在し、南西の尾根上には加賀田神社が位置している。また、当遺物が発見された場所から南で200mでは、平安時代及び室町時代の遺物、井戸が検出されている。



第11図 尾崎遺跡遺物出土地点

### 4. 遺物

(1) 口径13.9cm、受部径16.7cm、残高4.1cmの須恵器杯身。

立ちあがりは高く直線的に伸び、口縁部でやや内傾する。口縁端部は内傾する段を有する。受部はやや上外方に短かく伸び、端部はやや尖り気味におさめる。

口縁部は回転ナデ、底体部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデを施す。

胎土中には1~3mm大の白・黒色砂粒を含む。色調は内外面共灰色を呈す。

(2) 鎔部径29.2cm、(残高6.6cm) の羽釜鎔部。

口縁部上半を欠くが、外反する口縁部の間近に幅の広い水平な鎔をもつ。端部はやや尖り気味である。

体部外面はタテ方向のハケ目、口縁部内面はヨコ方向のハケ目、体部

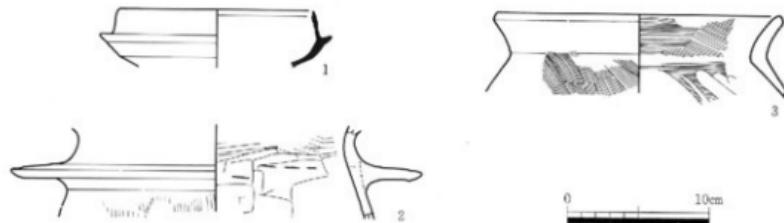
内面はヨコ方向のケズリを施す。鍔部は貼り付けの後ヨコナデ、端部はつまみナデを施す。

胎土中に1~2mm台の砂粒を含む。色調は内外面共にぶい赤褐色、鍔部下面にススが付着している。

(菅原正明氏の編年で、河内A型bに相当し、7世紀前葉頃のものと考えられる。)

(3) 口径20.3cm、残高5.9cmの土師質甌の口頸部。

口縁部は「く」の字状に外弯して直線的に伸び、端部はやや内傾する



第12図 尾崎遺跡出土遺物実測図



写11 尾崎遺跡出土遺物

凸面を成す。

体部外面は右下から左上へのハケ目（8～9本/cm）、口縁部外面はヨコナデを施す。体部内面はヨコ方向のハケ目（8～9本/cm）の後指ナデ、口縁部内面はヨコ方向のハケ目（9本/cm）を施す。

胎土中には1～2mm大の砂粒を少量含む。色調は外面がにぶい黄褐色及び灰黄褐色、内面は褐灰色を呈す。

市内においては、この時代の遺物の発見は古墳を除いて始めてであり、貴重な資料である。

河内長野市文化財調査報告書第14輯

河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

昭和63年3月31日

発行 河内長野市教育委員会

印刷 株式会社 中島弘文堂